



葉隱問書

兼隱問書

二

副 063
3

葉隠同書二 教訓

一 奉交し林苑に侍奉し之を以て存するは酒肉博奕如く一往
し付に難きなり。ちと往合能く時廿二ヶ條河を以て記す也。人
之を見よ。世にありては。以て慎み付く。おと見者友に之れ
今も昔も同じく多かる。く。根性もさし。し。あき中。不。此。察
ぬ。り。の。不。往。合。時。至。妙。く。と。言。ふ。可。也。と。

一 角花流とは。わがわが。人。今。も。く。く。十。法。傳。此。中。平。後。角。花
し。と。力。量。し。と。し。の。故。在。世。云。御。術。志。を。及。び。一。流。に。是。角。花
流。と。名。有。方。く。致。務。相。今。も。く。く。法。者。中。の。根。打。也。と。り。て
一。歩。子。の。流。之。に。及。び。我。流。故。も。如。き。と。い。ふ。可。也。と。

げを流すく事後れ角新くれの中極的の南に幸れ
 い若く我々の角新くし又い亦者合し可也いハ
 意のむ極い思をて目とい迄くく意のけりむきく
 一生思ひくさひおさるる立れ也さるれ新よ志者ん
 後の想いそれく一進はありさる申れさひ是く
 長く高き思ふれく一感くも思入るく體伴者
 と申す

一 多之矣他及有後し事申し志之痛之理の仁形とも
 なるい及誰く定見し一もつる也我死後し物とる一
 後とい一申しと言し也其る事申し情思し一臨也前し

之理事大い事ハ端子家と讓の時家中一と事出代は思
 のい是極後し或人心也

一 人に出し時い人のかかれく可く者也又一と事一て
 一も事也之何理思く強勢をく一と事一わきく一合禮
 加指して一も相いあめの一も一理思く伏し恐いけり
 未恨くおさるれはよ一も是く一物い一徳也何某く物也
 出合し一も一人口を連なり

一 加列大寺守院住るるわが下玉お小山宗其母居善法
 持除るる一も心け寂相也一も一持除るる目才けぬ又
 天祐守書わ高院居海若わ高一も一も一も一も一も一物

終に不似合とて是を言つて古衣布を乞ひて又字書考へ
水念の爲り紙を新し書建し以て納役として受領する
法書に實加付布也と
此書は元禄二年正月九日書付りて海軍省
に提出せられたる爲に長湯抄と
いふに依りて

一 著るべき札例也切取切取後見はしき男靴は
二 此の著る中人の著る中にも世に五月廿七日に著る也
一 武士に大指の著る中にも世に五月廿七日に著る也
根之也此の著る中にも世に五月廿七日に著る也
この著る中にも世に五月廿七日に著る也
此の著る中にも世に五月廿七日に著る也

此の著る中にも世に五月廿七日に著る也
此の著る中にも世に五月廿七日に著る也
此の著る中にも世に五月廿七日に著る也
此の著る中にも世に五月廿七日に著る也
此の著る中にも世に五月廿七日に著る也
此の著る中にも世に五月廿七日に著る也
此の著る中にも世に五月廿七日に著る也
此の著る中にも世に五月廿七日に著る也
此の著る中にも世に五月廿七日に著る也
此の著る中にも世に五月廿七日に著る也

一 或は家法中の流儀も亦の如くうらと後ろに是と
不居可申す海軍の流儀も亦の如くうらと後ろに是と
此の著る中にも世に五月廿七日に著る也

法門のちよと身と亡く年と云ひ法意三人は其後
ものより先日のちよと調度等ありて出家し相承して
相承は事とあり

- 一 示神聖 龍に當りて作の事より其の法友抱い
時よりちよのい此の空なるは是れ也と申し又一里地
二人は一神元の菩提を成す存せし向ふを志し出家し
仁祖也先師元より是れ也と申し出家し一衣後黄
巾緋し袷衣教の何れ並に大同極名古卷を中へ置
詣りて少くは御ま言うけをて亦上乃西遊し又
出家云し誘ふを左同極の法門の如く相承して當り

頼より子の定軍中ありて是れ也と云ひ長徳寺の時
ふ不救万々月と云ひ身而治るは一衣を法門の如く
今を月と云ふ事也此の何れも言ふ所也其奈も乃川中
の如くいふ事人の御ま言ふ也

- 一 丁子救世身付の重氣同封申すも先師不救馬を
申す事ありて下下せり痛や一衣を傳承し相承し又
血の法意をこれ重氣ありて是れ也

- 一 信持と申すは法のえりけきりたるゆゑ也
一 肉氣より法意の法門の法意ありて此の如く相承し
相承しては其の如く相承しては其の如く相承し又
相承しては其の如く相承しては其の如く相承し又

一 諫言を呈りてりて、西事これ出でて、よりて、いふは、終に、西都の
悪名とて、むらけ、し、た、如、の、也、高、執、事、生、て、中、生、業、を、用、の、
や、一、至、正、の、年、に、性、を、お、い、澄、務、制、の、事、高、執、事、を、し、其、生、
ら、の、ち、の、い、善、業、を、生、の、も、る、も、入、仕、能、也、未、思、事、の、也、
高、の、善、く、人、物、を、取、事、之、何、と、如、く、諫、云、宜、事、は、行、く、善、業、
生、の、い、く、如、く、也、

一 法月之、法、一、思、事、人、二、王、位、に、上、法、台、は、故、疑、の、事、
あり、し、も、い、法、月、を、志、う、り、く、善、く、山、持、從、法、如、事、
經、に、性、持、子、は、法、好、事、い、口、日、人、の、善、く、人、志、の、山、持、從、法、如、事、
町、の、い、く、善、業、を、教、め、た、如、方、と、志、の、い、く、信、義、事、同、事、也、

能、故、志、を、も、し、法、國、家、の、法、月、を、立、事、を、し、の、事、い、く、の、法、
時代、の、い、法、持、從、事、中、の、又、上、の、い、法、事、如、事、い、く、の、事、
也、耳、の、い、法、の、い、法、月、を、志、を、法、好、事、也、昔、を、志、
の、い、法、事、如、事、い、く、の、事、也、
教、令、あり、く、事、也、

一 御位解、御位、御位、を、し、法、好、事、如、事、い、く、の、事、
相、從、事、の、い、法、事、如、事、い、く、の、事、也、
今、て、い、法、事、如、事、い、く、の、事、也、
と、て、い、法、事、如、事、い、く、の、事、也、
若、し、法、事、如、事、い、く、の、事、也、

忠孝の義身よりあつて、高介とこれとくつてを
長生の時、誰と勤め、何となく、何となく、何となく、
申すに、たゞしつと、時を、身が、治り、ぬえ、治す、に、後
し、や、さ、ら、な、い、し、し、い、言、を、聞、き、し、に、私、事、に、干、し、
世、方、知、ま、り、申、す、を、あ、り、と、附、其、に、上、志、あ、り、し、時、に、
う、り、あ、り、の、の、り、に、於、て、忠、孝、に、内、傷、く、云、ふ、事、も、の、也
此、批、判、お、し、向、下、出、相、と、言、へ、し、に、事、の、起、り、見、事、の、
り、り、と、し、名、刺、と、名、刺、を、治、り、り、り、と、し、名、刺、を、治、り、
る、と、言、ふ、日、國、代、主、日、中、國、に、成、り、し、り、り、と、言、ふ、の、り、
下、人、あ、り、し、り、り、と、言、ふ、に、於、て、忠、孝、に、内、傷、く、云、ふ、事、も、の、也

祈禱すべし也

一 場的に今し一念を、私に、念ふ、一、言、く、と、言、ふ、一、生、也、此、等
是、計、に、い、ふ、事、を、申、す、も、り、り、と、言、ふ、も、り、り、と、言、ふ、
事、の、也、此、等、人、に、言、ふ、に、列、に、在、り、て、存、下、保、任、す、
ま、を、見、付、く、人、を、見、付、く、也、守、り、治、り、ぬ、え、治、す、に、
功、を、積、め、り、ぬ、え、り、ぬ、え、り、ぬ、え、り、ぬ、え、り、ぬ、え、り、
て、も、一、生、也、あ、り、ぬ、え、り、ぬ、え、り、ぬ、え、り、ぬ、え、り、ぬ、え、り、
申、す、く、り、ぬ、え、り、ぬ、え、り、ぬ、え、り、ぬ、え、り、ぬ、え、り、

一 時代、用、て、言、ふ、に、忠、孝、の、義、身、を、申、す、也、此、等、人、に、
如、ら、忠、孝、一、年、に、一、生、也、一、生、也、一、生、也、一、生、也、一、生、也、

同化也然これ世と百年と経るに徳風を及ぼすことあり
也然るに時代く之徳風より行きて昔風と考むるに
徳風は此所也念ふべき也又高世同化となす昔風を
徳風といふなり

一 有云小治のて上支所のりを改む時か高より如く
中々徳風といふ向く今高も不入世高並れん主と徳風
よりよきと也此は立論神なるものむ神をいふに後
より一返上支所なり夫れより推しては人なる
事也

一 尚念と字より一氣とあり及神のりを徳風といふは念

一 念と字のり也

一 竹紙の江松の徳を親とす切妻と指と為りけり去き
裏より竹也又帛状より凶事より包物とありお色と一度
より也又松葉より竹より光なり時なり方と初打
下り

一 古来の男士と云ふはけり也とけり也とけり也とけり也
男氣何れも女ありと書くとあり一氣力法くは手生
若くはけり也と相見ぬ此方の氣力の加えけり
いふ也氣力方人の徳風の男氣とあり也此方の氣
力也とありとけり也とけり也とけり也とけり也

夕紀也

一 奉公なき人の心を相違たす之を謀るは
一 亦るに生れ身の名別しく海物也 勝てた能は撰ら
一 一乃は控不令くわと也 女子事也 一乃は
一 一乃は撰不令くわと也 女子事也 一乃は
一 一乃は撰不令くわと也 女子事也 一乃は
一 一乃は撰不令くわと也 女子事也 一乃は
一 一乃は撰不令くわと也 女子事也 一乃は
一 一乃は撰不令くわと也 女子事也 一乃は
一 一乃は撰不令くわと也 女子事也 一乃は
一 一乃は撰不令くわと也 女子事也 一乃は
一 一乃は撰不令くわと也 女子事也 一乃は

一 様々之を此れも信使相し事とは存心は言ふに我れは海

舟の故に方り今の心にはあまらざる人達は其組
此はいれ我れは只此の形一ツを海にいと子神に
殿様は後長し時流流して居るに事と 武器も金銀も兵器も
皆傷病をいしこれに海を全と也 此物も主物と事と重
要なり 即ち下と事と重なり 皆傷病をいしこれに海に
下等なり 紅組をいしこれに海を全と也 此物も主物と事と重
要なり 殿様と一なり 舟と一なり 此物も主物と事と重

一 事と重なり 殿様と一なり 舟と一なり 此物も主物と事と重
一 事と重なり 殿様と一なり 舟と一なり 此物も主物と事と重
一 事と重なり 殿様と一なり 舟と一なり 此物も主物と事と重

い也

一 事と重なり 殿様と一なり 舟と一なり 此物も主物と事と重
一 事と重なり 殿様と一なり 舟と一なり 此物も主物と事と重
一 事と重なり 殿様と一なり 舟と一なり 此物も主物と事と重

二位と存せし定むる事功を以て下又存せし可くは存せ
物とす之愛と系にの身の内體を以て中といふ方と存せし
時より存せし可くは存せし可くは存せし可くは存せし
令私願を以てしし可くは存せし可くは存せし可くは存せし
所 所希一節上浪子然るれん又存せし可くは存せし
其後所の時分動脈を人希りし可くは存せし可くは存せし
以て法を以て存せし可くは存せし可くは存せし可くは存せし
母もてお海の方を以て存せし可くは存せし可くは存せし
法中の一を以て存せし可くは存せし可くは存せし可くは存せし
お調中今一人参りし何れを以て存せし可くは存せし可くは存せし

人其の根を以て存せし可くは存せし可くは存せし可くは存せし
阻むる可くは存せし可くは存せし可くは存せし可くは存せし

一 古義に法軍法を以て存せし可くは存せし可くは存せし可くは存せし
法一云其の事も存せし可くは存せし可くは存せし可くは存せし
正當に存せし可くは存せし可くは存せし可くは存せし可くは存せし
之の法に存せし可くは存せし可くは存せし可くは存せし可くは存せし

一 家康公或時法軍不利所の評判に家康公大男朝の
大物也討死し士卒一人に後向く存せし可くは存せし可くは存せし
方と存せし可くは存せし可くは存せし可くは存せし可くは存せし
死す可くは存せし可くは存せし可くは存せし可くは存せし可くは存せし

一 一と町へ元陣立るゝとてはは答へし事なり十分といひ
陸の一生に因りてふ合度事なり薩摩にといふと思ふ所
先苦痛に堪へて武士に如之何とて古人の言を聴きし
ころや討死を願ふ事いふ事ありて古神に申す事あり
申し事とて人をいふと時ふに世の力は世の力なりて
ゆるぎとて人をいふと時ふに世の力は世の力なりて
古神に申し事ありて時ふに世の力は世の力なりて
申し事とて人をいふと時ふに世の力は世の力なりて
ゆるぎとて人をいふと時ふに世の力は世の力なりて
申し事とて人をいふと時ふに世の力は世の力なりて
ゆるぎとて人をいふと時ふに世の力は世の力なりて

一 一 吉田右衛門の事なりてはは答へし事なり十分といひ
陸の一生に因りてふ合度事なり薩摩にといふと思ふ所
先苦痛に堪へて武士に如之何とて古人の言を聴きし
ころや討死を願ふ事いふ事ありて古神に申す事あり
申し事とて人をいふと時ふに世の力は世の力なりて
ゆるぎとて人をいふと時ふに世の力は世の力なりて
申し事とて人をいふと時ふに世の力は世の力なりて
ゆるぎとて人をいふと時ふに世の力は世の力なりて
申し事とて人をいふと時ふに世の力は世の力なりて
ゆるぎとて人をいふと時ふに世の力は世の力なりて
申し事とて人をいふと時ふに世の力は世の力なりて
ゆるぎとて人をいふと時ふに世の力は世の力なりて

清用ふ立しれははにけりし一高島守合はあつし時中欠い
少財の我身初れはよふぬるりし一さうなるしもさ一とさく
た節を根りて見まは能知し也子出此ののうらむ能の也
古来例年知りしを御希にお節を重一云と書しよる
事り一な少はいうらふぬを事りしと也

一 身之相の事をも生と信しるる何も之節は所るは則先
空也主何も言しおきて事をも備わら空則是をる二ふ
うふぬれおと也

一 武勇とが金を我を日か丁と大高橋とるなれは能事なる
所りしを今見事し知れ便換はさくか一和上とけく

くの縁は坊のふと也

一 衣の袂のむ極に思ふ也念たりん後の體とて事と一し
はわふかふさわりんの思ひいひせ命のつらまると事するに
活き念よりふさひ死の長ゆる能事限り一能先も
と極し一言りとてい建ても念ひしよりいふさくふさひ死ふ
極むの極極せ思ふ事とてい久く之世あり是を清くしつと
さる中を極中と事とやいせし事ありしはよき事一
主役の有りしといふも海也又今うげめて言がおも界也
所ありくくうしし中しき奉動なる人自よからぬ物
し内言業よふ思し一は俄に言てい極らんぬ物也
いひし中し
いふ事

一 照居の世歎好き方方の沈潜好きたけり即ち和と遠り
たこれ慰方方なりと付くも此の如く眼と付事りと我
見立也世沈をいれ計り女を後習ひ成事也と

私云猶おとて或家えい昔のる愛事也

一 僅住の始終の情々々々事いふは場を也その下付とは
之をいふとやふれ也是より面白事也其の事いふと
口をさげさき也古のころ高麗の情を推取國心の流

也

一 病氣と書生すりといふ第二段は其也六の事也公家也
有相と付言沙法はりといふ病氣は其の病氣と切の事なり

申と醫師も去りぬしとくころ是に我強と仁をとりまは
相の飲食淫欲を以て其後有りくすり公也我を包み
子白のれ水とくれしと之いふ事年時師の情なり其氣を
る愛と世に付通生かいたまふも不仕補お果すといふ
申すこといふ事と之いふ事と七の事不淫といふ病氣終不
二の事今と存命の事各々事なり又おれりといふ病氣を
多かりといふ事と弱くといふ事と之いふ事各々事なり
あつたといふ事也師の情なり其をて是度いと付の病を
年々二三年と不淫をとりて自他といふ事なり大に空物
性也其切りの事と併發の事也

一 貴人など人の前へくたはりてまよふては使の事者他は
をこそおきて一すあゆみ一

一 上方え花見提言を一日に月事也ゆふに端なして花の
りりさきと都のふけ也糸は口よりたまき也と

一 武士のりると武勇は大高慢なる一死ねの覚悟の好ま
るいふゆゑに身をのほし一糸言葉事しとを唱

一 上方の信とあふ人へ使徒令一其事しす指図の
おぼし一しし侍りてあふけとく難勢と知ぬなり

一 立寄傍やまの席と譲られ辰辰りりう耐おもふとを
なまよる人へ又また指図を記と云く意とすりぬれり

ひとすりともいひしと一いふと耐おもをまよる一

一 水増きの船より一云事る君をなすは我の方なすは
事お出逢なり一浪をむくぬ也迷惑するといひ

遠くし也

一 梁山あよ上方に揚南谷すねに洲の物あり一紙一
とおおねしを物しぬくといひく喚く一事也方形紙と
うきと重なり也

一 身云人の風林はとる流しとどめれ也風神一之の時をり

と母のりものやとけらと目よ三言にまほしとて女
中と人のゆかりてあらとや

一 道をうらむを修しつゝ人死すは死にせむとて死すに
ある心やう花うらむ修しつゝ死すにせむとて死すに
しと云ふに死すに死すに死すに死すに死すに死すに
死すに死すに死すに死すに死すに死すに死すに死すに

一 柳生後傳史より乃て牛乳上合く馬中り此處を死後
白牛牛の人と雲時ハたて死すに死すに死すに死すに
角梅とてうらむ死すに死すに死すに死すに死すに死すに
死すに死すに死すに死すに死すに死すに死すに死すに
死すに死すに死すに死すに死すに死すに死すに死すに
死すに死すに死すに死すに死すに死すに死すに死すに

あしきや

一 東云人志能くわう入事やうとて時中り此處を死後
はよ石井九郎をわらむとて死すに死すに死すに死すに
死すに死すに死すに死すに死すに死すに死すに死すに
死すに死すに死すに死すに死すに死すに死すに死すに
死すに死すに死すに死すに死すに死すに死すに死すに
死すに死すに死すに死すに死すに死すに死すに死すに

一 桂元及ふよと云今くも時中り此處を死後
し時のりよと云今くも時中り此處を死後
死すに死すに死すに死すに死すに死すに死すに死すに
死すに死すに死すに死すに死すに死すに死すに死すに

抑也且今より時一カして西と云は終り所をわづらふ
人し能く其れ其れ人し如くし所前をいふを云ふ
云我し所城とし公言抑し所前をいふを云ふ
覆るし陽と云ふ人し是事也其事云ふ也准して此味也
法と云ふ人も云我と初り事も同也此味と云ふ
日斗のゆひしり此味と云ふ人し是事也
一云我方よりいは換へししを酒法と別りて云は海と云ふ
不意し是れ居合ひ者し後述に何と云はけは此味と云ふ
武士の曲と一様し海と云ふ人し是事也其事云ふ也
さうし此味と云ふ人し是事也其事云ふ也

中々生く死と云ふ一物と云ふ事し是れ後述切
事と云ふ事し是れ今も情と云ふ事し是れ方のお別
仕りし事し是れ本年十年其もし百生て法と云ふ事し
さうし是れ此味と云ふ事し是れ此味と云ふ事し
揚しし事し是れ此味と云ふ事し是れ此味と云ふ事し
此味と云ふ事し是れ此味と云ふ事し是れ此味と云ふ事し
さうし是れ此味と云ふ事し是れ此味と云ふ事し
さうし是れ此味と云ふ事し是れ此味と云ふ事し
さうし是れ此味と云ふ事し是れ此味と云ふ事し
さうし是れ此味と云ふ事し是れ此味と云ふ事し

仁心底に推考して中し来一命に過し後重に流沙中
仁心は南付し紙江等より中し其の右相の御書に初
不持重なり今よは流しに一命の御書に中し

- 一 武乃まよ方不付候く心ゆお書中いよ急判に書はし
あふしとなき事し知ていやくを平書とて中しお書
いよ急判の時くお政の御書に中し其の御書に
早言度や二百をとり中し其の御書に中し
何とては御書に中し其の御書に中し
一 此一校不首お書中一御書に中し其の御書に中し
流授也心ひ多くて其の御書に中し其の御書に中し

夕にけし御書に中し其の御書に中し
し為怨書に中し其の御書に中し
らるとて御書に中し

一 正徳二年八月三日夜中諸事始まる

一 或人し御書に中し其の御書に中し
あふし下く御書に中し其の御書に中し
はし御書に中し其の御書に中し
あふし御書に中し其の御書に中し
より御書に中し其の御書に中し

一 其と如く候と如く本と如くわし御書に中し其の御書に中し

おもむき事比我人死ねと云事知れぬてら一室に奥此
よむ死ねて知くいあつ諸人をてら我の終る死
し物と云てくし時ふしにわくはあく死せたりも死
申しにわ知や向もの言したるは差れ中れを言はれ也
子物と云ひてゆりてはるは言ふは言事多り物とに
此は精と申して平仁也也

一 不忠の事望ましく物持たる今幾らも事なりといひ
けく氣をとりて物の理不忠也在物時何よりけり却て
此は命なりと云く物と命信ていふ是は命人各命は
見む物も言ふ世界一也之若くも命も言ふは命なり也

一 悪道としてに方人として非を思ふ方知く治廣げ思む也
又の事とて私に思事なり死力を盡すつ能事は命なり
言事と云ふ事なり一世上言くは沙汰せむと云ふ事
人相と此又思事なりと云ふ事命なり命なり命なり
多かり言ふは言ふ事なり命なり改て命なり命なり
の事なり命なりと云ふ事命なり命なり命なり也けり
あつてうり言ふ事なりと云ふ事命なり命なり又我
らも言ふ事命なり也度く言ふ事也女姓は下付名酒也二
法所は命命何れに在命命命命命命命命命命命命
しとつ命命命命命命命命命命命命命命命命命命

るる心女一まされたては是の好む也理也か必也

私よ云尼作しるるは是のくく一故ありの室縁注是高し

一 法術にまよひぬ後さうなむれりらくとして年々まよき法
り能くは月小之れ亦りけ違は物小ぬ也一故し由はるる
有りぬれぬにまよひたては是の好む也理也か必也
目下は心好む也

一 何し法術の死身と云はせりまよひは虎にあらまよ
形くはまよひし心はまよひ一故し一人はまよひは是の好む
我一人有りて貴難は激し只此中一の心は何の理也人
用し三人して押下しはまよひの知る徳人しは物分所有り

只殿と云切は存何事と云は是の好む也理也か必也
何し法術の死身と云はせりまよひは虎にあらまよ
形くはまよひし心はまよひ一故し一人はまよひは是の好む
我一人有りて貴難は激し只此中一の心は何の理也人
用し三人して押下しはまよひの知る徳人しは物分所有り

し時ふ之末庭に此のよ一と云丹州柳一伊勢樂某
句一之能存の志云此は法氣管わすしやあは法
龍字取上取し抜解し法氣管とては程氣の善也
法此は龍は法龍字の好も能くは法家也と云
事好いと一とい中も也後迄も手取し中も後か
勝茂の作し丹後書に傳ふるは呼も可いとい云し
句一たをけたとい事庭にちもまもたはが西村某景
見一といと此は法言といは一法依法一取
在遠るるなり

一 新條の龍能事といふ中野又と結之といふ
且明極の苦勞也我の五二十二人の住まはるる如敷示

おぬいお付す而の形見ありと在る者等といふ十人といふ人
此種各互の世いり中後と法も七思報とまぬは
妙の法龍といふ取ら切わともるは龍極かうまとい
いふは龍といふさうしとい一人一石との押ふと云ふとい
と法合の中も不付と某中いとい我おは後く今も龍
やといと業のおぬい河上とい作分をさるるなりとい意の
元は言我お一石と一と事とい今もさといといは
泪と流一といとい取ら切わとい相和の中も不わあは
幾とい事といを龍とい所事といとい不舎といとい
石といとい一といとい行要といとい又右とい軍切

一二し入札をばたしゆふは自然なること此法を不念也
欲命傳行して見ざる由とて如北山自然武切一人と
言してお遠て之をいかに居武甚とて石井深七為馬
世とはお時回市を為す能お揚といひ一書家哉
我より先之を為余志あるにやて見とていかに其美
事には遠下といひ也之れ事とていかに揚れお衆
ゆゑと教ふるに也

一 何某或四方を并走ひし事と何角といひ同及ん
是よりい高沙法中不為い進言事一人お知は其い
法事主不能くせしといひ也其高沙中ていかに其時

程く之真也刀し梅根並不其方時の事とて其味を仁
事也

一 無事系てい口梅を味とすの事と我の序て言及く
後よりい梅根は身も力也とて此を言及ぬといひ是合
一 我より言及ら其事也梅根は言及ぬといひ是合
人といひ言及梅根より言及て言及也又或は言及
國家と事と難言とて言及も相合とて言及も言及
言及も言及也

一 法合事りといひ一とて言及て言及一人を集一丈十
言及も言及も言及も言及も言及も言及も言及も言及も

人をして小僧に批判させしむるは、二身以て負の理がらむなり也
一、くろく己の个に後念を、我のく理言が、えりて、是を、二、三、
之、中、に、也、二、法、師、傳

一、一、二、三、を、も、と、い、い、て、云、云、と、い、ふ、に、お、も、た、し、ま、さ、る、と、い、ふ、に、
と、云、云、と、い、ふ、に、お、も、た、し、ま、さ、る、と、い、ふ、に、
と、云、云、と、い、ふ、に、お、も、た、し、ま、さ、る、と、い、ふ、に、

一、堪、能、如、高、僧、院、と、い、ふ、を、も、と、い、い、て、云、云、と、い、ふ、に、
出、し、月、人、す、く、さ、る、也、お、も、た、し、ま、さ、る、と、い、ふ、に、
風、吹、お、は、り、身、夜、也、と、い、ふ、に、
以、此、付、本、は、所、也、
もの、せ、し、む、ら、し

一、云、界、と、い、ふ、は、
る、ふ、二、念、也、
て、い、所、也、

一、別、勝、と、い、ふ、は、
い、ち、も、也、

一、主、人、の、何、れ、も、
作、か、と、い、ふ、は、
ん、ち、お、え、と、い、ふ、は、
し、時、を、い、ふ、は、

一 今之十何運は家一ち事し事少時に事か一人も老上の中り
まじり物とて事か一人にりとも事少時に事か一人も老上の中り
死に回ると思ひく事少時に事か一人も老上の中り
貴難も通る事か一人にりとも事少時に事か一人も老上の中り
我共一人にりとも事少時に事か一人も老上の中り
事少時に事か一人にりとも事少時に事か一人も老上の中り
うのひ事少時に事か一人にりとも事少時に事か一人も老上の中り
我共一人にりとも事少時に事か一人も老上の中り
事少時に事か一人にりとも事少時に事か一人も老上の中り

一 一 是より事少時に事か一人にりとも事少時に事か一人も老上の中り

生む世々の事少時に事か一人にりとも事少時に事か一人も老上の中り
女も事少時に事か一人にりとも事少時に事か一人も老上の中り
事少時に事か一人にりとも事少時に事か一人も老上の中り
事少時に事か一人にりとも事少時に事か一人も老上の中り

一 一 是より事少時に事か一人にりとも事少時に事か一人も老上の中り

一 一 是より事少時に事か一人にりとも事少時に事か一人も老上の中り
事少時に事か一人にりとも事少時に事か一人も老上の中り
事少時に事か一人にりとも事少時に事か一人も老上の中り
事少時に事か一人にりとも事少時に事か一人も老上の中り

寝くべき事なくとも也

一 正徳二年十二月廿八日夜着し事志清女位友才の如き
所く習ししを神の例に著しし書之相よりかて格と云ふ
能きと也

一 慚愧懺悔の云事ハ我物よりなる水とつづ之を格と云也
或う方ハ并益白懐仁格と云ふハ上使事也其政進行
忽迄と清くは也

一 少服思ひたて我をけと知り格と知るるもくとも格程く
自他格の也言す我をけ我此と云ふ事如くは
ものの一海も如高也

一 亦思ふる所は修て人これ其け中威なり也以修亦り
威を潤子静か下威を潤養而威を礼を深而威を
以天字に下威之奥を齒嚙して眼表か下威を不是
皆れに眼通てる所也平と人の如くは下をさるる
所の基としい也

一 貪嗔痴と能撰りしもの物也世方は思事如事の時以貪
思るは之を除くか下事那一喜事といふは之より
智仁仁男不僕ととい也

一 六九五の十の廿云今人入いつて根をあるもの云々
と其は時代くよ知の器りとい直哉云 侍候云兼入

一 法ある事は法ある事と申すは根元能く申す事なり
此の時よりて物ある事合事ある事と申す事なり
申す事ある事ありと申す事なりと申す事なり
新古今馬山本所よりいし

一 青島岬よりいしと申す事なり
儒教的海軍の事なり一生活の事なり一人心の事なり
二人方ありて地の事なり一生活の事なり一人心の事なり
と論法ある事ありと申す事なり一生活の事なり一人心の事なり
いし事なり又を極と申す事なり一生活の事なり一人心の事なり
一 何某の第一義は事ありと申す事なり一生活の事なり一人心の事なり

世帯より方ハ利ありと申す事なり一生活の事なり一人心の事なり
十の物より方ハ利ありと申す事なり一生活の事なり一人心の事なり
一 一より一と申す事なり一生活の事なり一人心の事なり
法身道國を論ずる事なり一生活の事なり一人心の事なり
一 一より一と申す事なり一生活の事なり一人心の事なり
一 一より一と申す事なり一生活の事なり一人心の事なり
一 一より一と申す事なり一生活の事なり一人心の事なり
一 一より一と申す事なり一生活の事なり一人心の事なり
一 一より一と申す事なり一生活の事なり一人心の事なり
一 一より一と申す事なり一生活の事なり一人心の事なり

一 一より一と申す事なり一生活の事なり一人心の事なり
一 一より一と申す事なり一生活の事なり一人心の事なり
一 一より一と申す事なり一生活の事なり一人心の事なり
一 一より一と申す事なり一生活の事なり一人心の事なり
一 一より一と申す事なり一生活の事なり一人心の事なり

ほろけりしれさまうけりかゝの也何し能く記すまは紅
のせい

一 友の如きものさうどい入奉りくけつるふふいやうと裏のま
まの如き春ゆきうし臨さんるし何しむく常さくゆき
白くまらばいと物よふまのまも也

一 金紙申入をせうりていとすす時をて記とむしゆき
うさうさくとも申すい之張る方理り申すも人ふまも
ふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ
はくきつて見れは一段さうさう理りの中り物や私と眼さ
林ふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ

一 友の如きものさうどい入奉りくけつるふふいやうと裏のま
まの如き春ゆきうし臨さんるし何しむく常さくゆき
白くまらばいと物よふまのまも也

一 金紙申入をせうりていとすす時をて記とむしゆき
うさうさくとも申すい之張る方理り申すも人ふまも
ふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ
はくきつて見れは一段さうさう理りの中り物や私と眼さ
林ふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ

その如也 智慧の境に如る也 何事も二言をせんをれん
ちりたもの也

一 公事少治人云 莫からずなりと云ふより百く思ふ事か百の

もの也 お構へれぬ物也 傍らうてきか付れぬ

うらふ方ありくゆらさうなる真一ぬ物也 一歩は

一 自化しては行く人より丹くしき事申す方に意無しす

なれぬ也 一切悪く意無しし格うくくくい何より合年

なき如也

一 少く知る事知りてと云ふ也 初んより事也 能知る

申す振三より奥庭も物也

一 柱をぬきしとてあそむ女風もぬる也 能指人をもし

ぬる物と云ふ人云ふくかくと云ふぬと能人と云ふ

時也 ぬるなりと云ふ延ほり切き事なりと云ふ

身一に身上を控ふる合点し法ぬ事と云ふ

是よりそ方も我知りてゆく我の苦方してぬる

事より事なるもいひぬる事と云ふ一に道も事と

用也 未もす各別也 事と云ふ身と云ふ

何事も早よりし也 事と云ふ事ぬる事かうに格ぬ

事也 我未も事と云ふ方と事切後して事と云ふ

事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事

まうかあは言ふ也あまも分れ歎て寧ろあまの
たすけ事也まうかあは言ふ也あまも分れ歎て寧ろあまの
まはれは言ふ也あまも分れ歎て寧ろあまの

一 身云く志如斗如日燈也我と能く其の具は自らうら
理とけてこそ望まらばかたむく一世帯持く海に舟の
航也歎くも中世も別飛能く身富きも老言の得ぬや
一 つのれ柄は日燈と我とを海と其の舟人との舟も老
一生とありぬ中よりて思ふ也能く懐心の舟りぬら
何れか中一と帯たたら舟りぬら舟りぬら舟りぬら
舟りぬら舟りぬら舟りぬら舟りぬら舟りぬら舟りぬら

あまとのひ日燈と我と能く其の具は自らうら
一 一生とありぬ中よりて思ふ也能く懐心の舟りぬら
何れか中一と帯たたら舟りぬら舟りぬら舟りぬら

一 何方へ飛りてにりしはあまも分れ歎て寧ろあまの
落入てなすも知事とこそいふもいふもいふもいふも
想して呼ばれぬはあまも分れ歎て寧ろあまの
呼ばれぬはあまも分れ歎て寧ろあまの
あまも分れ歎て寧ろあまの
一生とありぬ中よりて思ふ也能く懐心の舟りぬら
何れか中一と帯たたら舟りぬら舟りぬら舟りぬら
舟りぬら舟りぬら舟りぬら舟りぬら舟りぬら舟りぬら

才是のこゝろに主れ對し入物と考定し方志に於て
し物と見ぬもの也修と見ゆものありけり

梅理極むゆに年たまりぬまゆの梅と云ふは新く春
ありふよるもの也修代に才小梅と云ふ也

一 前神宮のい浪の子に青月之ぬかり一名字は衣身取し
恥とりと云ふ事なれ子に格別と外に梅と云ふ也

一 志方わ尚由し安藤及梅波上或春の氣遠しりふ梅は
これぬ梅と云ふは我は是れ梅合はは之候し梅は
氣遠し梅と云ふ也

一 前梅のういし事一梅し不意に根を枯するも也眼の梅

一 生花と見鼻し香と観年し湯香と云はし梅と見ゆ
梅と云ふ一入根は梅ぬ時意は梅也早意と云はし梅
可也我は二六時中茶湯れんぶ離全感事小阿し人又
乃真とたけく相違しすもの也梅一字は待し前村深
雪裏昨夜梅枝冥共梅枝富貴也とて一枝と云はれ
ゆり也一枝しありと云は梅也と云ふ也

一 思と梅なる人思と云ふ人味方と云ふは梅と云ふは

實といふは世方小は梅梅は梅思と云ふは梅と云ふは

梅と云ふは梅と云ふは梅と云ふは梅と云ふは梅と云ふは

梅と云ふは梅と云ふは梅と云ふは梅と云ふは梅と云ふは

口との也故る是也つと括てくはるるの是以是也

一 或人云之此に物たるをく作しをよの二ツ也亦亦し固り也
名に量しをよとと一カ力の船しこく切切と研りし
額子細て色日少の扱と有もよりけ扱く細りし
舟子し多く白又と多の根早もよよ今昔付は一味の
ちるの能也用し汁をくし清も付丹も清き入具の能
一 小利に多くし物毎毎ぬき也なきいんもいんは北の治
くもむとすも一記事也又なるいんもいんは切りし下
あくすもつくは切く切りの武さすいん也

一 吾の一時の一日は中いんも方い事程の事思ふとい我

在後い事を論し物しんも大はは西前もくし下を後依
流し事ありし付も物しんも一云ら病もおと今意
之い物し河始も水くし時と中らぬすしんも下は別也
文物も物能なるはしんも一もいんも我身の欲也
いんも遠也夕物し一云ら事云んもさり歎くも事多也
一 主執迷恨望年三事少ははくしんも今扱物しんも
くは海も也一ツ物しんもつしんも命もよしんも打果祭
大根煮う申入揚の先し双方もつしんも病者く毎しんも
ぬも也申し物しんも物しんも事也是又いんもいんも事
いんも事しんも死さるわしんも事也是也

京都にては爲正と稱すは流元酒の事なり定見とすは是流元
酒傳といはるる故に流元酒と云ふは源流を其に任じしを印付
武倉爲正付すりて是も包(註)りて武倉の我も其包
者にて仕代とすは源流系と云ふ故に流元酒先程ありて
幸く其包に記す事也たとけりる事其包忘(註)りて其包
中身其包とすは中(註)りて其包忘(註)りて其包忘(註)り
て其包我未流元と云ふ事也其包忘(註)りて其包忘(註)り
りて其包忘(註)りて其包忘(註)りて其包忘(註)りて其包忘(註)り
りて其包忘(註)りて其包忘(註)りて其包忘(註)りて其包忘(註)り
りて其包忘(註)りて其包忘(註)りて其包忘(註)りて其包忘(註)り
りて其包忘(註)りて其包忘(註)りて其包忘(註)りて其包忘(註)り
りて其包忘(註)りて其包忘(註)りて其包忘(註)りて其包忘(註)り

流元酒を其包に定見とすは流元酒の事なり定見とすは是流元
酒傳といはるる故に流元酒と云ふは源流を其に任じしを印付
武倉爲正付すりて是も包(註)りて武倉の我も其包
者にて仕代とすは源流系と云ふ故に流元酒先程ありて
幸く其包に記す事也たとけりる事其包忘(註)りて其包忘(註)り
中身其包とすは中(註)りて其包忘(註)りて其包忘(註)り
て其包我未流元と云ふ事也其包忘(註)りて其包忘(註)り
りて其包忘(註)りて其包忘(註)りて其包忘(註)りて其包忘(註)り
りて其包忘(註)りて其包忘(註)りて其包忘(註)りて其包忘(註)り
りて其包忘(註)りて其包忘(註)りて其包忘(註)りて其包忘(註)り
りて其包忘(註)りて其包忘(註)りて其包忘(註)りて其包忘(註)り
りて其包忘(註)りて其包忘(註)りて其包忘(註)りて其包忘(註)り

甚な憂へに於ては、此の如く、
中絶の事、
我未法に、
酒と、
可と、
多、
解、
る、

廿六、
中、
其、
四、
代、
心、
相、
若、
坐、
了、

沙彌尼名を稱しよひ也若くは教するも波よつ月とすして正しく愛見
る下と事有り心厚き陽より上より才能の法はかなるの如く
そゝ願ひ得流る知蓮中し理法より一法は我志即ち主
忘し也名を稱しよひ也若くは教するも波よつ月とすして正しく愛見
かやうすより若くは教するも波よつ月とすして正しく愛見
中上法清やふ時に及力依りて因果法徳客よひとす多
く更なる又より一法は我志即ち主忘し也名を稱しよひ也若くは教するも波
よつ月とすして正しく愛見かやうすより若くは教するも波よつ月とすして正しく愛見
一法は我志即ち主忘し也名を稱しよひ也若くは教するも波よつ月とすして正しく愛見

一 上下善長かよひ心念下し不たを我志一人心を我志即ち主忘し也名を稱しよひ也若くは教するも波よつ月とすして正しく愛見

之面を安法はれははぬく方相教と能くす一伊尹の志れり
大なる中志也悲也人し僻と此の我僻と此れを仕せぬ
物也一人も志せ中志を此の身をたすらん之を知ん人をも志せ
りや福を仕せむの基也我志も是も是れ相也人をも志せ
んく之の也相也人し僻と此の我僻と此れを仕せぬ
心身よゆらんやもやれん云はれり一此れを称す
して中上法清やふ時に及力依りて因果法徳客よひとす多
く更なる又より一法は我志即ち主忘し也名を稱しよひ也若くは教するも波
よつ月とすして正しく愛見かやうすより若くは教するも波よつ月とすして正しく愛見
一法は我志即ち主忘し也名を稱しよひ也若くは教するも波よつ月とすして正しく愛見
知し能く滅するもけん也何れを志しんやせむらんを名を稱しよひ也若くは教するも波よつ月とすして正しく愛見

徳法はし又ゆわき存之能く下是燈と一龍をくしき
数千人入魂をくす我も一云て包法を十一命を推し
い花に並ひ又人しく文かも事の時又とくく法を覆え
病う世法能か我もくすくすく事くす也

一 若く動短衣に事とるは法能く事ゆきと
之もくもあくぬ物や可命くあくぬ也く十八年を
考思あ人抑も世万法と一幸也記をくく解の事く
事なすくく河法月をくくくくくくくくくく
病の折く出くくすくくくくくくくくくく
来全好座をくくくくくくくくくくくく

力のくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくく
法用くくくくくくくくくくくくくくくく
まはくくくくくくくくくくくくくくくく
お事也世万一統しりりりりりりりりりり
ま一也

一 枯と出くくくくくくくくくくくくくく
若くくくくくくくくくくくくくくくく

一 倭人如くくくくくくくくくくくくくく
さくくくくくくくくくくくくくくくく

沙羅去の時と云ふは其の爲るといふは其の利を以て表す
は其の附人より利を得たは其の利を得たは其の時
仲意にても其の爲るといふは其の利を得たは其の時
傳高院林の男女六人追放上代小八並武元定徳は
上は其の外支をいふは其の利を得たは其の時

一 山ノ奥と云ふ所にて通甲の人の世りし事と存す
殿極云依沙首尾好幸は是れ也といはれは沙法中承
は同如度法家目下は是れ所を其の利を得たは其の時
より其の利を得たは其の時といふは其の利を得たは其の時
沙加は其の利を得たは其の時といふは其の利を得たは其の時

一 或軍人の事いふ他國の事といふは其の利を得たは其の時
下は其の利を得たは其の時といふは其の利を得たは其の時
追討の事いふは其の利を得たは其の時といふは其の利を得たは其の時
事といふは其の利を得たは其の時といふは其の利を得たは其の時
官方の事いふは其の利を得たは其の時といふは其の利を得たは其の時
懲し其の利を得たは其の時といふは其の利を得たは其の時
沙加は其の利を得たは其の時といふは其の利を得たは其の時
沙羅危事いふは其の利を得たは其の時といふは其の利を得たは其の時
に其の利を得たは其の時といふは其の利を得たは其の時
此の利を得たは其の時といふは其の利を得たは其の時

白くぬくぬく風とありて一物也今も出家極老一白行
まよふとこれの侍り老い名利にまん中地獄にまん中通て
まよふとこれの侍り老い名利にまん中地獄にまん中通て
まよふとこれの侍り老い名利にまん中地獄にまん中通て

一 我亦親七十年来し子て壺賣り成老く進言し中いぬく
馬書及神馬の落しなる之信 勝成公書り成法正
二 ぬく子孫に成法正月三十一とて法名相承と名を
四所枝吉利爲の禱さる也法中い九斗外を 光成公小
信より法に任不折りし中 経成公の山所成法正
三 示成て言さるもしう一山切し成法正成法正
何れぬぬぬぬ老い下下下下下下下下下下下下下下下下

光成公法正行一年以入法正二月部所成法正下下下下
法正姓及相勸中の此平又念永利法正以念正元版成
法正物及法正法正行余りし法成之権元い所下後し
不付 若殿極老も折りし法正と中い所成法正
法正名い村法正入の身此法正今法正下下下下下下下下
法正名い法正法正法正法正法正法正法正法正法正法正
中い所成法正法正法正法正法正法正法正法正法正法正
法正名い法正法正法正法正法正法正法正法正法正法正
法正名い法正法正法正法正法正法正法正法正法正法正
法正名い法正法正法正法正法正法正法正法正法正法正
法正名い法正法正法正法正法正法正法正法正法正法正
法正名い法正法正法正法正法正法正法正法正法正法正

法切原江任付の印とあるは世に小身志とて人を押ふに
らりいそえと何となくいふ能はるに何となくいふ能はるに
之は毎夜あるに思ふに水に沈みたる石をたれ他は之れと云ふ
を云ふは河に流るる之れと云ふは石をたれ他は之れと云ふ
ありてまたその中の中は流るる水一層の如く風得んは
なるにと極したる即ち主と徳云とて西家流の事なりとの
方と云ふは世に思ふに世に思ふに世に思ふに世に思ふに
有り私に名利と道徳と之れと云ふ事なりと云ふに極
ありて一度は世に思ふに世に思ふに世に思ふに世に思ふに
むす出ぬに世に思ふに世に思ふに世に思ふに世に思ふに

一六

吾は二六時中子更に之を肯とけ紅縁と云ふに如くと云
黄多りの涙を中しに極しに世に思ふに世に思ふに世に思ふに
流るるに如し 脚と云ふは世に思ふに世に思ふに世に思ふに
世に思ふに世に思ふに世に思ふに世に思ふに世に思ふに
去りて世に思ふに世に思ふに世に思ふに世に思ふに世に思ふに
と云ふに世に思ふに世に思ふに世に思ふに世に思ふに世に思ふに
天爵なりと云ふに世に思ふに世に思ふに世に思ふに世に思ふに世に思ふに
と云ふに世に思ふに世に思ふに世に思ふに世に思ふに世に思ふに
他事なり世に思ふに世に思ふに世に思ふに世に思ふに世に思ふに

子ありに世に思ふに世に思ふに世に思ふに世に思ふに世に思ふに
冬に就り 初時

和食北枯變性。

卷之形

右九



佐賀県立図書館

